

素足で踊る舞踊のための 身体運動の技術Ⅳ

—上肢と下肢の動きの関連2—

堀 切 紋 子

序 舞踊のための教授・指導・創作・表現法には身体的・精神的な2つの面が考えられる。その身体的な面の中には、呼吸・アラインメント・けが防止のためのからだの正しい使い方などに立脚して、からだの各部分がどのように動くかを知ることが重要な点としてある。

素足で踊る舞踊のための「動けるからだ」を造ることを目的に、足と脚の動き（92舞踊学第15号別冊）、肩と腕の動き（94舞踊学第16号）、そして、それらを土台に、上肢と下肢の動きの関連（95舞踊学第17号）の糸口を述べてきたが、上肢と下肢の動きの関連の第2段階としてさらに、足と脚の動きの発展を基本において肩と腕の動きがどのように現れるかを記述する。

本論 肩と腕の動きは、周知のように、その動く範囲が前後・左右・上下・それぞれ斜め方向と広く、8つの領域に立脚して表すことができ、また「片腕で動く」、「両腕で[同方向に]、[反対方向に]、[対称方向に]動く」など、多様である。ここでは、「片脚がどのように動くか」の第3段階を基に、片腕の動きがどのように現れるかを記述する。「片脚がどのように動くか」の第1段階は、起立位のその場で「外輪・内輪に」動く（図1）を、また、第2段階は、基本的に「前後6方向」（92舞踊学第15号別冊）を言う。さらに、その第3段階を右足（脚）で表すと、① 右斜め前から起立位を通り右斜め後ろに弧を描く動かし方、② 左斜め前から起立位を通り左斜め後ろに弧を描く動かし方の2種が基本（図2）となって、7方向（位置）が挙げられる。

①では、冠状縫合面で分けられる前・後域での右足の現われ方は、それぞれ「外輪に・内輪に」の足の置き方が見られる（図3①-a, b）。そして、腕の動きは体幹と肩の動きに伴って、前域では左腕が、後域では右腕の動きが現われる（図4①-a, b）。

②では、冠状縫合面で分けられる前・後域での右足の現われ方は、それぞれ「内輪に・外輪に」の足の置き方が見られる（図3②-a, b）。そして、腕の動きは体幹と肩の動きに伴って、前・後域共に右腕の動きが現われる（図4

②-a, b）。

これらは、右足（脚）で表しているが、左足（脚）も同様に表すことができる。

結 これらを、さらに「両腕で動く」とどのようになるか。また、「回転」の動きへの発展を追求することが次の段階として重要である。そして、これらは、素足で踊る舞踊のための「動けるからだ」を造る身体運動の技術の基本に位置づけられるものである。

